

自分の馬鹿なミスで大金を失うと、あとあとまで悔いが残る。あれは何かのパレードだったろうか。小学生の時、神宮外苑に行事を見に行つて、その日のために大事に貯めた五百円札を落としたことがある。昭和三十年代初頭の小学生にとつて五百円はとてつもない大金で、神宮外苑から自宅まで何時間もかけ通つた道をなめるように探し回つた。裸の五百円札が道に落ちているはずもなく、打ちのめされた気持ちで泣きながら家に帰りついた。お金を失くすことが如何に悔しく、どれだけ心残りを生みだすかを知つた初めての体験である。

そんな経験があつたからだろう。社会人になつて出会つた心温まる経験には本当に涙が出た。筑波大学へセミナーに行く途中、上野駅で財布を落としたことに気がついた。自宅まで帰つていたらとても間に合わない。駅の交番でお巡りさんに頼んだが、「お金を貸すなどとてもない」とけんもほろろに断られた。セミナーを準備してくれた親友、集まってくれている友人たち。彼らの顔が脳裏に浮かび真つ青になつた。

ところが何たる偶然。「その先の通路で見つけたのですが……」といって、年配の男性が私の財布を届けに来たではないか。信じられない思いだったが、目の前にあるのは確かに私の財



絵・江口修平

失くしたお金・拾った財布

奥野正寛

布。おかげでセミナーにも間に合い、楽しい一日を過ごすことができた。後刻、感謝の気持ちを込めた礼状をお送りしたことは言うまでもない。

そんな経験があつたためだろう。財布であれ何であれ、落としものは警察に届ける、落としたら警察に問い合わせるのが当然だと思つていた。しかしそれは、どこでもいつでも正しい訳ではないようだ。

二〇年ほど前、ニューヨークはマンハッタン、セントラル・パークからほど近い五番街の交差点で、路上に分厚い財布が落ちていたのに気がついた。「早速、警察に届けねば」と友人たちに言つたら、皆は「何で？」とキョトンとしていた。「当り前だろう、それが」と言つたのだが、彼らは「それで失くした当人に戻るはずもない、当人もそんなこと期待していない」と言う。それでも通り合わせた騎馬警官に「そこで見つけた財布です」と渡したのだが、警官も乗り気になかつた。

「困つたときは交番へ」という習慣があるから、失くした人は一縷の期待で交番を尋ねる。落とした人の気持ちを考えるから、見つけた人は拾った物を警察に届ける。日米の習慣や考え方の相違が、このように大きな違いをもたらしているのではなからうか。

おくの・まさひろ●1947年、東京生まれ。1969年東京大学経済学部卒業。1974年スタンフォード大学経済学部大学院 Ph.D. 東京大学大学院経済学研究科教授を定年にて退任後、現在、流通経済大学経済学部教授。1988年『産業政策の経済分析』により日経・経済図書文化賞、1990年『交通政策の経済学』により交通図書賞受賞。他に『経済システムの比較制度分析』『平成バブルの研究』など編著書多数。

